アルメニアのマラシュ刺繍
―インターレーシングステッチが教えてくれる刺繍の秘密―

石　井　美　恵[※1]

はじめに
Ⅰ．アルメニアの刺繍
Ⅱ．刺繍の代表的な表象
Ⅲ．マラシュ刺繍
Ⅳ．刺繍の教育
おわりに

はじめに

アルメニア共和国は1991年にソ連邦より独立した国家で、南コーカサス地域に位置し、西にトルコ、南にイラン、北にジョージア、東にアゼルバイジャンに囲まれた海のない二重内陸国である。紀元後301年に世界で最初にキリスト教を国教に定めた。首都エレヴァンの西20km、車で20分のエチミアジンにアルメニア正教会総本山があり、「エチミアジンの大聖堂と教会群ならびにズヴァルトノツの考古遺跡」は2000年にユネスコ世界遺産に指定されている。筆者は2011年から2014年まで国際交流基金の主催でアルメニア国立歴史博物館にて博物館専門職を対象とした染織品の保存修復研修を実施した。[1)] また2015年に美術工芸振興佐藤基金の助成を受け、エチミアジン大聖堂付属博物館にて祭礼染織品の調査を行った。[2)] そして2017年にはアルメニア文化省と東京文化財研究所文化遺産国際センターの共催でアルメニア国立歴史民俗研究センターにて染織品保存修復研修に講師として携わり、外国人としては異例の待遇でアルメニアの染織品を深く知る機会を得えた。アルメニアの染織品とは何かと問われれば、それは糸に込められたアルメニア人の魂だと答える。文化遺産の保存修復は物理的にモノを残すための手段だけではなく、モノに内包されている精神や信仰といった目に見えない、手で触れられない要素をも残す姿勢が必要だと考えている。国際協力という枠組みの中で研修を実施することに際して、アルメニア人が何を大切にしているのか、それを一番に知ることは筆者にとっての命題であった。アルメニアの刺繍について研究をはじめたのは、刺繍が染織品の修復と同様に糸と針を用いるので親しみやすく、糸と針の世界は言葉の壁をも乗り越えられると感じたからである。アルメニアへの訪問を重ねるたびに、少しずつ刺繍について調査してきた。本稿では日本でこれまで紹介されていないアルメニアの刺繍について概略したのち、現在のアルメニア共和国で伝承されている「マラシュ刺繍」について論じ、最後にアルメニアにおける刺繍を含む美術教育を紹介して、日本の課題でもある伝統的な染織技術の継承について考察する。

Ⅰ．アルメニアの刺繍

首都エレバンの共和国広場の中心に位置するアルメニア歴史博物館には、１階に絨毯、２階に民族衣装が常設展示されている。２階の一室は19世紀から20世紀初頭の民族衣装をマネキンに着装させた展示、もう一室は刺繍が展示されており、多様な様式と技法を持つ様々な刺繍が見て取れる（2017年９月現在）。国立博物館の展示からわかることは、アルメニアでは絨毯、民族衣装、刺繍を重要視していることである。

今のアルメニアの染織品を知るには、共和国広場に隣接するヴェルニサーチ公園で毎週末に開かれる市場を訪れるのがよい。2016年に屋根付きの屋台が整備されたがそれまでは中古の日用品や手工芸品を売る青空市であった。南の道路側に刺繍と絨毯の露店が連なり、街路樹の間に紐をわたしてテーブルクロスなどを下げて売っていた（図１）。刺繍の模様は聖書のミニアチュールやザクロなどの伝統文様で、精緻な刺繍も見受けられた。売り手（作りて）の女性たちに話を聞くと、アルメニア政府の認定を受けた刺繍家やロシアの工芸コンクールに入賞した

※1 佐賀大学

図１　ヴェルニサーチ市場の刺繍と絨毯の露店。2011年４月。

ような名手もおり、作風や手技の違いを見て回る面白さがあった。刺繍はアルメニアの女性たちに受け継がれてきた伝統的染織技術であり、作り手が市場で販売することで家庭に現金収入を入れる手段でもある。刺繍について聞くと、「これはアインタップ」、「これはマラッシュ」、「これはヴァンのジャニャック」と異なる様式の刺繍を指して教えてくれた。聞き取った単語を辞書で調べてみると地名であることが分かった。アインタップはトルコ南東の町のことで、刺繍の特徴は白地にドローワークという飾り窓をあけた刺繍技法、マラッシュもトルコの南東の町で、黒や赤のベルベット地に原色の糸で縄を編んだような十字が刺繍されていた。ヴァンはアルメニアの北の町で、ジャニャックとは牙を意味して白糸を針でノッテイングしたレースであることがわかった（トルコのオヤと同技法）。アルメニアの刺繍に関する英語文献がきわめて限られたなかで、フィールドワークを通じてようやく分かったことはアルメニア刺繍とひとことで言えるものは存在しないということである。アルメニアの刺繍は土地に由来した呼称をもち、「アルメニア刺繍」とは異なる意匠様式と技法の総称である。刺繍が土地の名前で呼ばれるには理由があり、それはアルメニアの歴史と深く結びついていた。刺繍は女性たちが自らのコミュニティーの目印として、土地に根差した独自の刺繍様式を確立することで、他のコミュニティーとの違いを糸と針で表現してきた。アルメニアはキリキア・アルメニア王国（1080または1198または1375年）として中世に領土を拡大したが、1636年にオスマン帝国とサファーヴィー朝ペルシャに分割統治された。キリスト教を信仰するアルメニア人は対外的には支配者の宗教であるイスラム教の戒律に従って行動し（例えばアルメニア人女性は被り物をしないが、外出するときは被り物をするなど）、家庭やコミュニティーの中で信仰と一体となった民族のアイデンティティーを保ってきた。1826年の第二次ロシア・ペルシャ戦争でペルシャ領アルメニアはロシア領となった。そしてオスマントルコの支配下にいたアルメニア人とトルコ人の民族対立が激化し、1915–16年にアルメニア人大虐殺という悲劇がおきた。生き永らえた人々はロシア領アルメニア（現在のアルメニア共和国）、シリア、レバノン、フランス、イタリア、アメリカ合衆国へと亡命した。アルメニアの外には大きなディアスポラ（ギリシャ語に由来する、撒き散らされたもの）と呼ばれる離散したコミュニティーがあり、刺繍は異国で、また救済団体により孤児や寡婦となった女性の自立手段として教えられた（図２）。

現在のアルメニア共和国ではヴァンを中心とする地元由来のジャニャックの他に先に述べたマラシュとアインタップがみられる。一方、レバノンのベイルートのアルメニア人コミュニティーでは、レバノンで受け継がれてきた各地域の刺繍を集め、「アルメニア刺繍」（Tokm ajian, 2010）として刊行した[3]。地域的特徴をもったアルメニアの刺繍を元の土地を離れた所で継承するには民族のアイデンティティーをコレクティブ（集積）する必要性があることをアルメニア人たちは強く感じている。

図２　難民女性の刺繍ワークショップ。シリア、ダマスカス、1919年。（Noubarina Library パリ、所蔵。Marash Needlework, p.39 より転載。）

Ⅱ．刺繍の代表的な表象

アルメニアの刺繍を理解する上で欠かせないのがデザイン化されている模様の表象性であり、代表的なものを次に示す。[4)]

永遠（太陽十字）

永遠のシンボルのアレヴァハチ（アルメニア語 Արևախաչ）は直訳すると太陽（Արեւ アレヴ）十字（Խաչ ハーチ）を意味する。アルメニアの象徴で、アルメニアの球（アルメニア語 Հայկական գնդակ ハイカカングンダーク）とも呼ぶ。多くの場合は円の中に８枚の羽根が右回りまたは左回りで描かれる。アレヴァハチの起源は古く、青銅器時代にまでさかのぼることができ、アルメニア人が根を下ろした場所の遺跡などでも見つかる。また８という数は東西南北と地の四元素（空気、火、水、地）を足した数で世界を表し、アルメニアでは４とその倍数が好まれる。

太陽（花）

太陽神（アルメニア語 Արեգ アレク）は８点星、または８枚の花弁をもつ花で表象される。花弁の数は８枚に限らず、４の倍数もある。太陽のシンボルは永遠のシンボルと間違えられやすい。

生命の樹

生命の樹はザクロで（アルメニア語 Նռան ヌラン）豊穣と生の象徴である。

カップル（男と女、人々）

男と女または人々のシンボルはアルメニア人を表し、豊穣と生命の象徴である。

Ⅲ．マラシュ刺繍

マラシュは地名で、現在のトルコの南東都市のカフラマンマラシュ（Kahramanmaras）である。マラシュはキリキア・アルメニア王国の首都であり、1915-16年のアルメニア人大虐殺まで、ほとんどの住民がアルメニア人であった。生き延びたマラシュのアルメニア人の多くは、レバノン、シリアのアレッポとダマスカス、そしてロシア領のアルメニアに逃れた。マラシュ刺繍はアルメニアの繁栄とその土地にアルメニア人が存在した証であり、現代のアルメニアでも受け継がれている。2011年から始まったシリア騒乱で多くのアルメニア人がアルメニアに難民として逃れてきており、難民の女性たちはマラシュ刺繍で製品を作り、救済団体が販売する活動も行われている。[5)]

刺繍技法

マラシュ刺繍ではフラットステッチとインターレーシングステッチがつかわれ、[6)] どちらか一方だけで刺繍する場合と両方組み合わせた作品がみられるが、二つの刺繍技法（ステッチ）をあわせてマラシュ刺繍とよぶ。特徴的なのがインターレーシングステッチである。セルギ・ダヴティアンの『マラシュ刺繍』（1978）は広く流布した実用書で針運びの図解がわかりやすい。[7)]

フラットステッチまたはサテンステッチ（アルメニア語ゼイトウン zeitoun、イルガ irga、アルタズラマ altazlam）は並み縫いや刺し縫いを折り返しながら布面を糸で埋める技法である（図３、５）。

インターレーシングステッチ（アルメニア語カグドゥナグ kaghdnag）は、基礎となる糸を十字に交差させたあとに、糸を交互に越して十字に巻きつけてゆく技法である。（図４、６）十字を連続させる場合は、ヘリングボーンステッチを二重にし、線、円、三角、四角などが形づくれる。アルメニア伝統の石彫ハチュカル（khachqar）にも糸を交差させた文様が刻まれていることからハチュ刺繍とも呼ぶ。アルメニア人コミュニティーが根を下ろした土地には同じ技法の刺繍がみられ、インドではハッチワーク

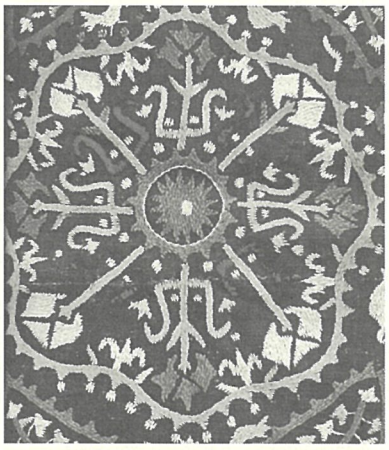

図３　フラット（サテン）ステッチによるマラッシュ刺繍。19－20世紀。（Harazdan Tokmajian アレッポ、所蔵。Marash Needlework, p.39 より転載。）

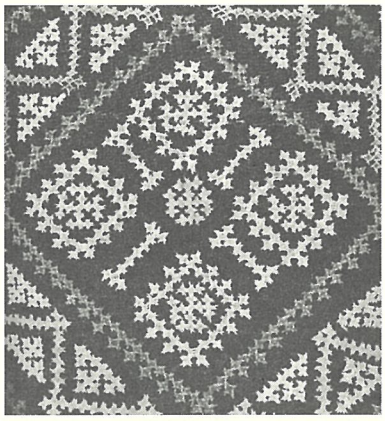

図４　インターレーシングステッチによるマラシュ刺繍。(Textile Revival at Crossroads, p.23より転載。)

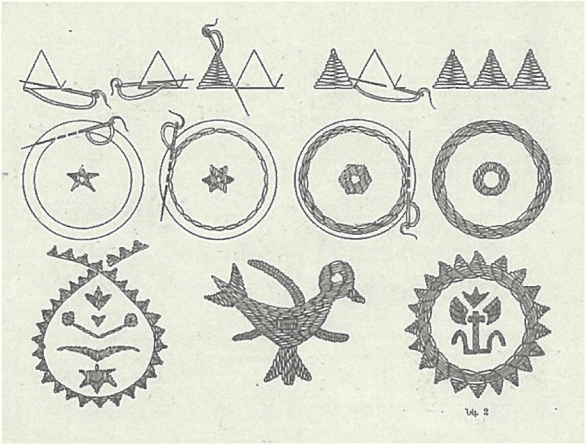

図５　フラット（サテン）ステッチ。(Marash Embroidery, p.14, 1978より転載。)

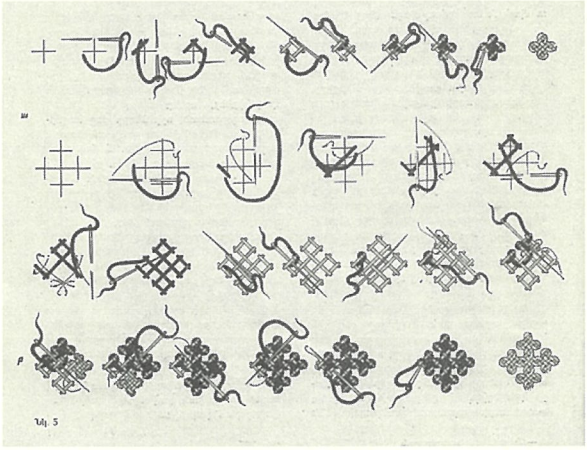

図６　インターレーシングステッチ。(Marash Embroidery, p.18, 1978より転載。)

(Kutch work、ヒンズー語でグジュラティ Gujrati または シンディ Shindi) と呼んで、インド刺繍として定着している。アルメニアとインドの違う点は、最終的な刺繍の仕上がりではなく、下絵の描き方にある。アルメニアでは十字の下絵を描き、十字の頂点に針を入れるが（図５）、インドでは出来上がり線を描き、十字を描かない。

糸は細く縒りの強い木綿糸や絹糸を用いる(DMC刺繍糸の5-8番程度)。フラントステッチで使う刺繍糸は木綿で、柔らかい甘縒りであったが、インターレーシングステッチでは細く縒りの強い木綿糸が一般的であったものの、ウール、絹、金属糸も用いられた。また針は、針先を繊維に引っ掛けないように先が丸い針が適している。

刺繍をはじめるには図案を選び、布に描く。アルメニア歴史博物館には十字の木版が展示されており布に捺染もされた。現在はものさしと鉛筆やチャコペンシルで下絵を描いている。

マラシュの用途は壁掛けやベッドカバー、テーブルクロスなどの室内装飾品であり、20世紀初頭の現存品を見ると、生地は赤、紺、黒、などの濃色の絹ベルベットや厚手の木綿や麻布が用いられている。

インターレーシングステッチは「秘密の刺繍」と呼ばれ、「秘密」を知っている誰かに教えてもらわないと難しい。十字の繰り返し模様を刺すためのヘリングボーンステッチの基礎糸の交差を間違えると、もはや正しく巻糸が入らない。マラシュ刺繍を実際にやってみると、十字の下絵を描き、それを道しるべとして基礎糸を渡して糸を巻き付けてゆくと自然と出発点に戻るという行為そのものが、キリスト教とアルメニアの永遠が融合したものであると感じとられ、アルメニアらしい刺繍であることが分る。

Ⅳ．刺繍の教育

エレヴァン市内には1970年に世界で最初に設立された子供の美術を専門に収集、保存、展示する子供美術館がある。設立者のヘンリク・イジチャン(Herik Igitian) は、1968年にエレヴァン市で子供の美術展を目にし、これらの作品が保存されるべきものであると考え、子供の美術を専門に展示するギャラリーを構想した[8]。この美術館に関連する組織として1978年に国立美術教育センターが設立され、各地に支部ができた。センターはソ連時代から子供の美術教育

を通じて民族性を伝える役割を果たしてきた。子供たちは放課後に習い事としてセンターに通い、絵画、木彫、織物などのクラスを無料で受けられる。筆者は2012年にエレヴァン市と2013年にタリン市の二校を見学したが、国立の美術教育センターにもかかわらず、住宅街の中にひっそりと教室があり、それとわかる看板がないことに驚いた。子供たちはマラッシュ刺繍で、伝統や様式にとらわれていない作品を作っていた。センターでは教科書を使わず、教師から児童へ言葉と手技で伝える教育をしていると説明された。アルメニア語の刺繍の実用書が少ない理由が、美術教育センターを見学して理解できた。民族のアイデンティティーの根幹を伝える美術教育の最も優れた方法は、人から人への伝達であり、苦難を経た民族はその行為を証拠として残す文字を用いずに美術を受け継ぐことであり、その中に刺繍も存在する。国立美術教育センターと大人向けのテリアン文化センター（国立図書館に隣接）[9]で刺繍を教えているのが刺繍家で刺繍教育の第一人であるルシネ・アフルツルヴァン先生である。（図７）著書『マラシュ刺繍の秘密』（2014、アルメニア語）は最後のマラシュ刺繍の本が出版されてから実に26年振り新刊である。[10] 筆者はルシネ先生からマラッシュ刺繍の教えを受けたが、著書を使わずにやって見せる方法で教えられた。ルシネ先生は伝統的に基礎糸と巻糸が同色の単色のマラシュから、基礎糸と巻糸の色を変えたグラデーションや現代の生活様式にあうデザインを紹介し、子供への教育では伝統模様にとらわれず、子供の想像力にまかせた絵画的な表現を奨励するなどして、マラシュ刺繍に新鮮な風を吹かせている。

図７　刺繍家ルシネ・アフルツルヴァン。国立美術教育センターにて児童が製作したヴァンのジャニャク（左）とマラシュ刺繍（右）。2013年。

おわりに

アルメニア刺繍とは土地に由来した呼称をもつ異なる意匠様式と技法の総称で、民族の苦難とともに生き永らえた染織工芸である。元の土地を離れた所で継承してゆくための教育を通じて、現在は民族のアイデンティティーを集積した形で各地の刺繍をアルメニアの刺繍としてアルメニア人コミュニティーが各国で伝承活動をし、現代にあった形に変化している。日本は伝統文化を重んじる風潮はあるものの、染織工芸を幼少の頃より教える公的なシステムはなく、現実として日本刺繍をはじめ、手織りなどの染織技術が急速に失われている。それにもかかわらず手立てを講じていない。日本人のアイデンティティーが日本刺繍や日本の染織品にあるという認識を再確認する必要があり、アルメニアの「秘密の刺繍」から学ぶことは多い。

謝辞

アルメニアでの国際協力にあたっては帝京大学の山内和也教授と藤澤明講師、東海大学の有村誠准教授、NHK 文化センターさいたまの横山翠講師のお力添えがなければ実現しませんでした。またアルメニアの友人達であるアルメニア歴史博物館染織修復室長マロ・ハルツルヤン女史、通訳のリリット・ハンスリヤン女史、翻訳者のルザン・ホジキャン女史、刺繍家のルシネ・アフルツルヴァン先生にご協力いただきました。本研究は国際交流基金および（財）美術工芸振興佐藤基金の研究助成にて実施しました。関係者の皆様に心より感謝の意を表します。

註

1）石井美恵・有村誠・横山翠　2014「アルメニア歴史博物館における染織品保存修復ワークショップ 2011-2014 事業報告」国際交流基金 .

2）石井美恵・横山翠　2014「アルメニア正教会エチミアジン大聖堂付属博物館における染織文化財の調査と保存」美術工芸振興佐藤基金研究助成報告書 .

3）Tokm ajian Hrazdan. Marash Needlework, p. 24. Aleppo: Union of Marash Armenians Karmaning Vasbouragan Cutural Union. 2010.（アルメニア語の英語同文翻訳）

4）Armenian Relief Cross of Lebanon. Armenian Embroidery. Armenian Relief Cross of Lebanon: Beirut, 1999.（アルメニア語の英語同文翻訳）

5）Homeland Development Initiative Foundation, 2/2 Melik Admyann St. Yerevan +374 77 473335 https://

www.hdif.org

6）Thérése de Dillmont. The Complete DMC Encyclopedia of Needlework.D.M.C. Library.（初版 1890）参考にしたのは復刻版で出版年は不明。

7）Serig. Davtian. Marash Embroidery, Yerevan. 1978.（アルメニア語にロシア語と英語の要旨。）

8）Charles E. Garoian. Teaching Art as a matter of cultural survival: Aesthetic education in the Republic of Armenia. Journal of Aesthetic Education 28(2) pp. 83-94, 1994.

9）National Aesthetic Education Center, Abovyan 13, 0001. Children's Art Gallery, Abovyan 13, 0001, Yerevan. Tel (+375 19) 520951. Teryan Culture Center Teryan 72, Yerevan 0009. Tel(+374 10) 587242, e-mail artteryan@mail.au, www.artteryan.com

10）Lucine Afrutuvan. The Secret of Marash Embroidery, 2014.（アルメニア語）

参考文献

ジョージブルヌティアン　2016、小牧昌平監修訳、渡辺大作訳『アルメニア人の歴史古代から現代まで』

グラント・ボゴジャン　2017『アルメニアをめぐる 25 の物語　駐日大使が語る遠くて近い国、古くて新しい国』